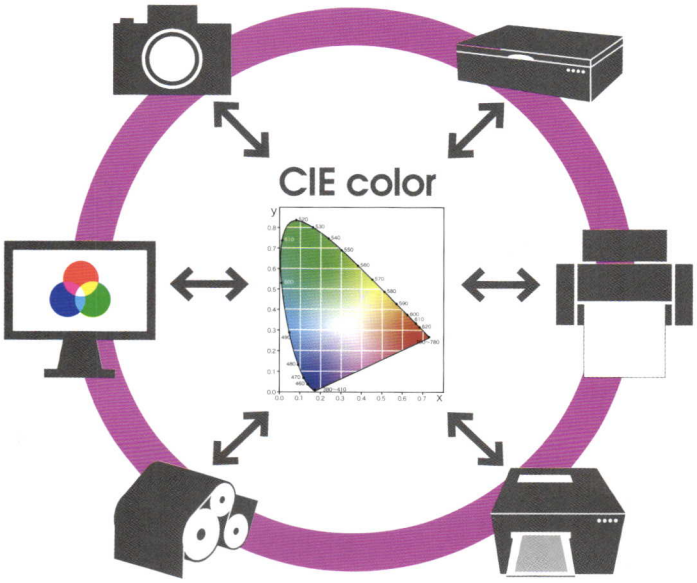
PAGE2008　ジョイントセミナー

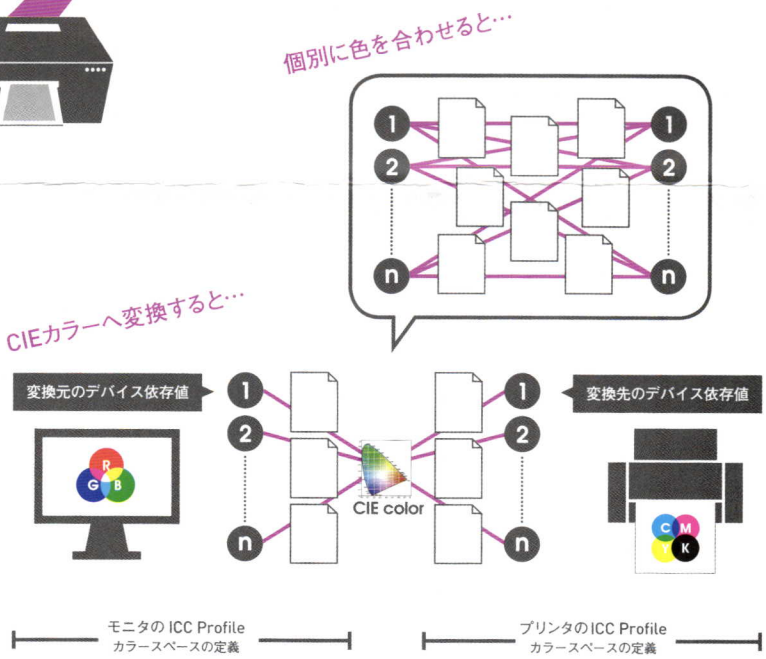
「体験！ カラーマネージメント実践ルール」

PAGE2008の会場では最終日に、体験型のカラマネセミナーが開催される。実用的な内容を詳しくたっぷりやるという、その中身とは。



Q カラーマネージメントって何？

A カラーマネージメント(Color Management System＝CMS) とは、モニタやプリンタ、印刷物などの色を合わせるための技術。通常は、同じ画像もモニタごとに色が違ってしまうもの。そこで測定器などを使って正確に色を扱う必要があるわけです。たとえばローカルに使われる長さの単位をメートル法で換算できるのと同様、色もRGBやCMYKの数値を国際的な色の基準であるCIEカラーに換算し、色のマッチングを図ります



Q カラーマネージメントはどうして必要？

A 複数のモニタで表示されている色とプリンタ出力の色を合わせたい場合、目で見ての調整では、何度もプリントをすることになってしまい、確実に合わせるのはとても大変です。CMSでは、測定器を使い個々の装置のプロファイルを作り、色の共通語とも言えるCIEカラーへの換算により、装置同士で個別に色を合わせる必要がなく、簡単で正確なマッチングが可能になります

4時間ぶっ通しの一大セミナー

PAGEでは、JAGATが企画運営を行っているコンファレンス・セミナーのほかにジョイントイベントが併催されており、DTP関係ではNPO法人日本パブリッシング協会・JPC（http://www.jpc.gr.jp/jpc/）がDTPワークフローについて、電塾（http://www.denjuku.gr.jp/）がデジタルカメラ周りを掘り下げて、パントン・ヘキサクロム・コンソーシアム（http://www.denjuku.gr.jp/）が広色域印刷話題について、DTPエキスパートクラブ（http://www.dtp-exclub.org/）が「居酒屋絵夢D」と称してカラマネの裏事情を披露するなど、例年、特色あるセミナーで多くの関心を集めている。

今回の「体験！ カラーマネージメント実践ルール」は、各団体のセミナーを一つにまとめて、4時間ぶっ通しの一大セミナーに仕上げたものだ。カラマネは業界を超えたもの同士の約束事のようなものである。その約束事を一冊の本にまとめたのが、『図解 カラーマネージメント実践ルールブック』（小社刊）であり、この四団体も著者や協力者として大きく関わっている。それなら一緒にセミナーをやってみようということで今回の共同開催となったわけだ。

「どんなものになるか？」の詳細は

未定だが、内容の濃いものになることだけは太鼓判。セミナー内容は実践ルールブックに沿って行われるが、海外からモニタやソフトの開発者を特別ゲストとして招くことも予定している？ということ。

また、「広色域印刷」等の有料セミナーのダイジェスト版（詳しくは有料セミナーを受講いただきたい）も視野に入れているらしく、たとえば、ヘキサクロムなどの多色印刷ではAdobe RGBでも色域が足りないため、「分光による画像データ入力のほうが適しているのでは？」といった問題提議など、このへんを科学するということなので、興味深い結果が報告されると今から楽しみである。

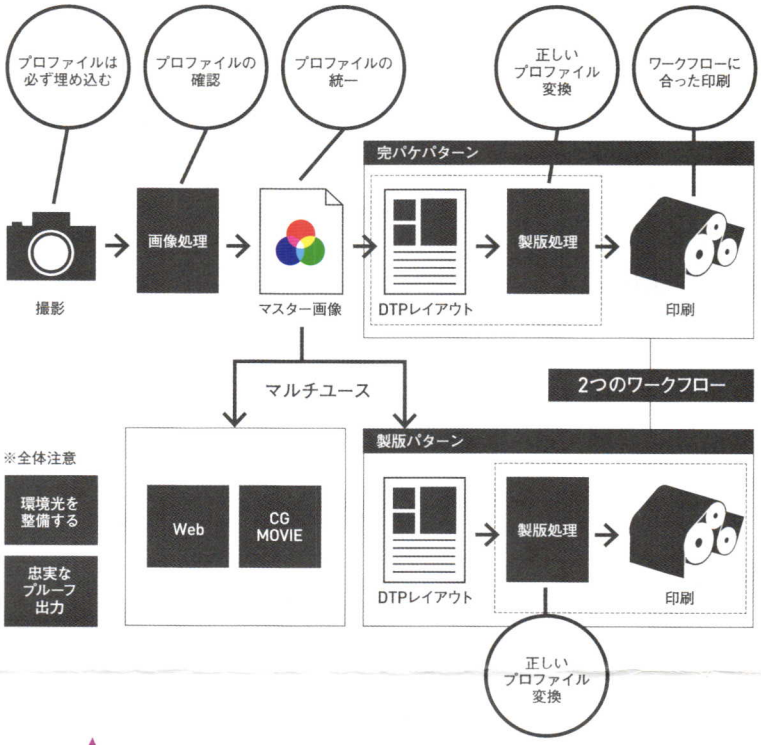
またRAWデータについて、DTPのカラマネという視点からMD的に科学的な検証を試みる「RAW入稿」のダイジェスト版もあるらしいといういからてんこ盛り（で消化不良になるかもしれない）。しかし、このへんこそ、各団体コラボレーションの真骨頂である。

受講申し込みは各団体のWebページをご覧いただきたいが、基本的には入場フリーで「立ち見覚悟」での受付を考えているとのこと。また、セミナー後は「居酒屋絵夢D」健在らしく、別部屋で+2時間程度用意されているのは、かゆいところに手が届くMDらしいところだ。そのへんもまた楽しみである。

column より正確な色を求めて 分光再現への挑戦

なぜ今、分光かというと、本来色はスペクトルの形状で決まってくるものだからだ。同じ周波数でもバイオリンとチェロでは音色が違う。これは波形（≒スペクトル）が異なるため。人間の聴覚はほんのちょっとの波形の違いも聞き取ることができる。たとえば安物のバイオリンとストラディバリウスの違いという具合に。しかし人間の色覚は微妙なスペクトルの違いを感じることはできない。それは色を感じる錐体というセンサーが三波長帯分しかないので、その錐体が同じ刺激量を感じれば同じ色として感じてしまう。「そういうものだ」と決めつけてしまってもかまわないのだが、しばしば光源による色の変化などで問題になる。タングステン球と蛍光灯で色が変わったりなどなど。これらのことは、カラマネで問題になる原因の半分以上を占めているのだ。こういうことを色の世界ではメタメリズム（見た目りずむ？）と呼ぶが、味覚の世界でも同様のことがいえる。味覚のスペクトルを定義して食譜といったりするが、これが似通っているとだまされてしまう。「キュウリに蜂蜜＝メロン」「プリンに醤油＝ウニ」という具合だ。とっておきはタクワンをホットミルクで食べてみてほしい。きっとコーンスープの味がする。

それならば「スペクトルをスペクトルどおりに再現してやればよい」というのが分光色再現で、CIE的な三原色よりはずっとすっきりしている。スペクトルをそろえてやれば、錐体が16種類くらいありそうなバルタン星人も同じ色に見えるということだ。今回は6分光で画像を入力してみるが、従来の三原色よりはずっと色の調子などは再現できる。三原色が地動説のように唯一絶対の真意のようにいわれてきたが、正確な色を表現するには少々古くさくなり始めているのも事実なのだ。



color RGBによるカラーマネージメントワークフロー

RGBフローというのは、画像のレタッチなどをRGB段階で行い、最終段階でCMYK変換やシャープネス処理を行うような方法だ。RGBフローに関しては、すでに技術的に確立されているので、あとは各人がきちんとプロファイルを付けて運用するとか、アプリケーションのカラー設定を正しくしておくといったことで、問題なく運用ができる。ただし、画像にタッチする人すべてが、これらのルールを守る必要があるので、「自分はよく分からないから、人に任せたい」というような場合でも、最低限のルールは守らなければならない。問題はないと思っていても、じつは自分の段階で色をおかしくしてしまい、そのデータを後工程でフォローしてくれているだけ、というケースも多い。カラーマネージメントの環境を整え、後工程に迷惑をかけないようにデータを受け渡すことが重要だ

PAGE2008 にて四団体合同セミナー開催

日時：2008年2月8日　13:00〜17:00
場所：池袋サンシャインシティ文化会館7F

図解 カラーマネージメント実践ルールブック
MD 研究会＋電塾＋ DTPWORLD 編著
ワークスコーポレーション／ 2,500 円
カラマネをリードしてきた MD 研究会と電塾のコラボレーションでカラマネの標準ワークフロー確立を目的とした業界定番の教科書である